

論文審査の結果の要旨

2021 年 2 月 8 日

学位論文題目 がん薬物療法における効果的な薬学的介入に関する研究

学位申請者 高田 慎也

審査委員 主 査 佐藤 秀紀



副 査 三浦 淳



副 査 桜井 光一



申請者は、再発・進行性大腸癌に対してセツキシマブ併用の化学療法を対象として、腫瘍原発部位別の皮膚障害の発生頻度や全生存期間への皮膚障害と腫瘍原発部位の関連について解析を行った。さらに、腎細胞癌にアキシチニブによる治療を行った患者における On/Off-target-AE の発現と生存期間延長効果の関連について解析を行った。さらに、わが国の医療用医薬品の副作用データベースである JADER のリアルワールドビックデータの解析により実臨床で発現した免疫チェックポイント阻害剤に起因する 1 型糖尿病発症のリスク因子について解析を行った。その結果、セツキシマブ起因性皮膚障害発現は、左側大腸群が右側大腸群に比較して皮膚障害発現頻度が有意に高いことを見出し、さらに皮膚障害発現ありと腫瘍原発部位が左側大腸群の両因子は生存期間延長へ寄与することが知られているが、皮膚障害発現がより有意な因子であることを示した。さらに甲状腺機能低下を含む On-target-AE の発現は生存期間延長効果を反映するポジティブマーカーになり、Off-target-AE の発現は関連性を認めなかったことから、有効性評価のマーカーである On-target-AE 発現による治療中断を避けるため副作用マネジメントの必要性を提示した。また医療現場の副作用の中には発現頻度が非常に稀であるため重篤な副作用が報告されても、そのリスク因子を特定することは通常診療下では困難であるため、JADER のリアルワールドビックデータ解析を行って、女性と悪性黒色腫がリスク因子であることを明らかにした。

以上より得られた知見は、がん薬物治療副作用マネジメントへの薬剤師の積極的な介入が期待され、さらなる発展に寄与することが期待される重要な情報をもたらすものと判断できることから本論文は本学の博士論文として評価に値するものと認定した。